

Title	[特別講演]フーコーと現代フランス文学
Author(s)	田村, 俣
Citation	仏文研究 (1990), 21: 181-187
Issue Date	1990-09-08
URL	http://dx.doi.org/10.14989/137759
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

フーコーと現代フランス文学

田 村 俣

今日のわたしの *conférence* が一つの *leçon* になりはてるか、それとも何らかの *exercices* といった展開をしめすことができるか、それはやってみないと分からぬが、とにかく始めてみましょう。

フーコーは現代フランス文学とどんな関係を保持しつつ自分のテキストを書いたのか？すでに周知のように、フーコーには、バタイユやブランショやクロソフスキーなどの現代作家に関する、他方、J.-J. ルソーやフローベールなどに関するエッセー、論文があり、これらはすべて1960年代に集中している。したがって、《フーコーとバタイユ》、《フーコーとブランショ》もしくは《フーコーとルネ・シャール》、《フーコーとレイモン・ルーセル》といった個別テーマについてお話しすることもできるのだが、やや一般的に、これらの現代作家論に共通して認められる、フーコーの問題意識、フーコーの *problématique* とは何であるか、について考察してみたい。そこで、本日の題目を《フーコーと現代フランス文学》という、いささか大袈裟なテーマにしてみました。

さて資料として提示しておいたフーコーの著作年表によって、まずは、フーコーの現代作家論を年代順に確認したい。詳細は、原資料の *The Final Foucault* の巻末年表に譲ることにして、60年代のフーコーは、つまり文学的フーコーと呼びうる60年代は61年の『狂気の歴史』に始まって、69年の「作者とは何か？」で締めくくられると考えてよい。その間には、「ルソー論」(1962)、「レイモン・ルーセル論」(1962)、「レイモン・ルーセル」(1963)、バタイユ論である「侵犯行為への序言」(1963)がある。63年には、そのほかに「無限をめざす言語」とか、Roger Laporte の作品論や、*Tel Quel* グループの討論会での重要な発言や、「距り、アспект、起源」という *Nouveaux Romans* 論がある。64年には、クロソフスキー論である「アクタイオンの散文」、「空間の言語」、「マラルメ論」、「ネルヴァール論」。そして66年には、『言葉と物』のほかに、「ジュール・ヴェルヌ論」とかブランショ論である「外の思考」、68年には「これはパイプではない」や「サルトルへの反論」、69年には『知の考古学』のほかに、論文「作者とは何か？」がある。

69年の、この論文を最後に、フーコーは文学への明示的な発言を行なわなくなる。つまり、年表を概観して確認してきたとおり、60年代のフーコーは、とりわけ現代フランス文学に関する多数の論及を行なったわけであるが、それらの論はいかなる特色をもつのか？ この本題に立ち入る前に、あらかじめ簡単に触れておきたい事柄がある。

フーコーは1926年フランス西部の都市ポワチエで生まれた。学生時代の40年代はヘーゲル哲学、現象学、実存主義の花やかな時代。たとえば、カミュの『異邦人』やメルロ＝ポンティの『行為の構造』は42年、サルトルの『存在と虚無』（そしてバタイユの『内的経験』）は43年、カミュの『ペスト』、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』は45年、コジェーヴの『ヘーゲル読解への導き』が47年、サルトルの『文学とは何か？』が48年（ここで脱線しておく、ぼくたち仏文の学生は、昭和27年にその初版の邦訳が出ると、早速そのヒドイ訳文の検討を研究会と称して夢中になって行なった）。つまりフーコーの学生時代はサルトルとメルロ＝ポンティとカミュの時代だった。サルトルを中心とする雑誌『タン・モデルヌ』の創刊は45年であって、これは後に述べる『テル・ケル』の創刊年1960年とともに、重要な、是非記憶しておくべき日付。

ところが1950年代は、Nouveaux Romans と構造主義の時代。ロブ＝グリエ（『消しゴム』は53年、『嫉妬』は57年）、ビュートル（『時間割』は56年、『心変り』は57年）、サロート（『不信の時代』は56年）そしてバルト（『エクリチュールの零度』は53年、『神話作用』は57年）とレヴィ＝ストロースとラカン。この50年代、フーコーは30歳前後であり、彼らと共通の知的風土を形成しつつも構造主義からの脱出を模索している。さらに1960年前後には、さらに若い世代のソレルス（フーコーより十歳年下の1936年生まれ）を中心とする文学グループが形成され、フーコーは彼らと交渉をもつ。このグループの雑誌『テル・ケル』の創刊は1960年である。

1960年代とは、どのような時代なのか。すでにフーコーの著作年表で見てきたとおり、文学的フーコーの時代と名づけるこの60年代を特徴づける手掛りとして、フーコーではなく、ドゥルーズの『差異と反復』から一つの証言を聞いてみたい。この引用資料に見られるとおり、①ハイデガーの積極的な位置づけ、②構造主義の役割、③現代小説の技法への注目、④これらに共通するテーマである《差異と反復》は、無意識・言語・芸術にも見出される、⑤反ヘーゲル哲学という共通性、⑥表象を主軸とする思想の破綻、それに代わる模像を本位とする思想の重視、が指摘してある。このドゥルーズのテキストは彼の博士論文の冒頭部なのだが、68年のこのテキストは、60年代の思想状況の明快な見取り図になっているのである。このテキストを介してドゥルーズは構造主義と Nouveaux Romans などの新思潮に加担しているのだ。そしてフーコーは66年の『言葉と物』によって、この新思潮の旗頭のひとりになっている。他方、サルトルは『言葉と物』の大成功を眼のあたりに見て、フーコーにはヘーゲル的な歴史が欠如すると批判して、フーコーが活用したのは「ロブ＝グリエ、構造主義、言語学、ラカン、《テル・ケル》」（『アルク』誌、30号、1966）だと極めつけているのである。サルトルのこれらの批判対象を、ドゥルーズは積極的に自分の理論構築のなかに活かしていると評価してよいのではないか。

『言葉と物』は、60年代フーコーの、文学的フーコーの最大の達成である。そこでは、先ほど名前をあげたバタイユやブランショなどの現代作家、さらにはサドやニーチェやマラルメの文学

の立場が基調をつくって、現代における, modernisme における文学の存在が探究されている, という読み込みをする必要がある。あえて言うなら、『言葉と物』はフーコーにおける《文学とは何か》の展開なのである。資料として示しておいた, 第九章の1《言語の回帰》のくだりは, その意味で熟読しなければならない。「今日のわれわれの関心事は, langage もしくは signe の問題である」という認識がまず披瀝される。「すべては signifiant である」とか「言語と存在の関係」とか「《文学》という名の言語」とかの鍵言葉に注目しよう。つぎに「19世紀のはじめ, discours の法則が表象から引き離され, 言語の存在が, 言わば断片化された」という指摘が重要である。これは「discours の消滅による言語の断片化」の現象であって, discours の重要な働きである表象の働きから言語が独立するとき, つまり言語が自主性を獲得するとき, 今日の, 近代の《文学》が生まれる, というのである。同じ論旨は, 同じ1966年に発表されたブランショ論「外の思考」にも見出さう。

これらの資料から容易に判断することができるように, 60年代の文学的フーコーの問題意識は, 言語とは何か, 文学とは何か, 文学にとって(思想にとって)言語とは何か, に集約されるのである。

結論の一部を先取りして言うとするば, 言語を formalisme の立場で把握しようというものである。この formalisme は, いわゆるロシア・フォルマリズムなどとも定義上は若干つながりつつ(参考, 『テロス』誌, 55号, 1983に所収のフーコー対談, 「構造主義とポスト構造主義」), 20世紀初めの, たとえば抽象絵画や12音階音楽やアンドレ・ジードの文学作品などにみられる formalisation の今日的な展開である。この formalisation とは, 言語において, 絵画において, 音楽において, 意味内容や社会的文脈や指示対象を括弧に入れて, すなわち, 外なる自然や実体験から離れて, 自立的世界を探究し構築する営みである。その自立的世界では, もっぱら, そこでの項目と項目の関係(多種多様な関係)が考察の対象となる。項目のあいだの関係の究明と構築(創造)が目標である。バルトや後のデリダなどをも含めつつ, 60年代のフーコーは, この formalisme の立場である。この立場を別種の表現で特徴づけるならば, 反実在論である。フーコーやテル・ケル・グループにとって, いわゆる réalisme は存在しない, 存在するのは langage のみである(参考, 後出の『テル・ケル』17号, 1964 に所収の「小説にかんする討論」)。

こうした formaliste としてのフーコーは言語をどのように把握するのか。フーコーにとって言語の特色とは何か。そのことを三つの側面において要約したい。

第一に, 言語は, 言語外のものとは別箇の自立したものである。つまり, auto-référence(自己言及・自己参照)の構造をもつ。したがって, signifiant が signifié より重要である, いや, signifiant しかないのだ。いやいや, そうした二項対立よりも, 言語のなかの多様な項目(文と文の関係の水準, 語のあいだの水準での)の関係こそが検討の対象である。それらの関係は auto-référence の

関係である。言ってみれば、合わせ鏡の関係なのだ。60年代のフーコーのテキストには、周知のように、しかしまだ包括的には論じられていないものの、鏡のテーマがしばしば取りあげられている。そうしたテキストの一つ、「無限をめざす言語」（『テル・ケル』、15号、1963に所収）は、みごとに合わせ鏡論であって、そこに繰り返される「言語の reduplication」は鏡のテーマの言い換えである。あわせて「言語の auto-représentation」という用語にも注目しておこう。それらは、ドゥルーズの著作にもしばしば記される, répétition や simulacre のテーマでもあった。このような合わせ鏡の例示としてフーコーが述べている、Borges の短篇（参考、『神秘の奇蹟』）の要諦を訳しておこう。

ボルヘスは、死刑を宣告された作家の物語を語っているが、銃殺刑に処せられようとするその瞬間、この作家は、書き始めている作品の完成のために神から一年間の猶予を認めてもらう物語。生と死とのあいだで宙づりにされているこの作品は、まさしくすべてが反復されるドラマである。つまり、結末（これから書かれるべき）が書出し（すでに書かれている）を一語一語そっくり繰り返す、ただし最初の情景から語っていて我々読者が知っている登場人物は、彼自身なのではなくて、自分を彼だと思いこんでいる別の人物であることを示すような仕方で繰り返すのである。死が今にも襲いかかってきそうな時に、それは雨のしづくが自分のほほをしたたり落ち、自分が吸った最後の煙草の煙が消えようとする年月のあいだ、フラディークは反復という目に見えざる大なる迷路を、つまり二重にされ自分を自分自身の鏡と化す言語活動という大なる迷路を、誰ひとりとして、神でさえもが読みえない言葉を使って書き記す。そしてフラディークが最後の形容詞を見つけ出すと（多分それは最初の形容詞でもあっただろう、というのはドラマは再開されるので）、一秒もたたぬうちに発射された銃の射撃によって胸は動かなくなるのである。

反復ないしは合わせ鏡をテーマとするこの短篇は、どこを切り取ってもことごとく、auto-référence の適切な見本となっている。紋章学で言う mise en abyme（入り子型構造）の具体例でもある。（参考として、Dällenbach の興味深い研究書は一読に値する）。

第二に、言語の内的関係としての虚構性、もしくは distance という性質がある。これについては「距り、アスペクト、起源」（『クリチック』誌、198号、1963）に詳しく展開されているが、その要点部分を訳しつつ解説を加えたい。

虚構のもの、それはまさしく、日常的なるものの彼岸でもなく、日常的なるものの内的な秘密でもなく、あの矢の軌跡、われわれの眼を打ち、すべて姿を現わすものをわれわれに提示するあの矢の軌跡だとしたら？ 《マラメル好みのこの矢の軌跡の image は、フーコーが

愛用するものでもあって、次を読むと明らかになるとおり、言葉の力のシンボルなのだ。それならば、虚構のものは、事物を名づけ、それら事物を語らせ、語の至高の力によってすでに分割されているそれら事物の存在を言語のうちに与えるだろう。(中略)

虚構とは言語である、などとは、だから、言わないことである。この言いまわしは、こんにちおなじみのものだが、あまりにも単純ということになろう。よりいっそう慎重に、虚構と言語のあいだには、複雑な所属関係が、支えが、異議申立てがあると言うべきだ。そしてまた、ペンをとって書くという単純な体験は、その体験が発言をひかえる状態をできるだけ長く保った場合、一つの距りの束縛を解くのであって(中略)、この距りは、世界にも無意識にも眼差にも内面性にも属さないものであり、この距りは、インクの線の基盤状の目とか、さらには街路の交錯をも(中略)、裸の状態で提示するものなのだ。そして最後に、虚構のものを定義してくれと求められるなら、わたしとしては、器用にはいかぬが、こう言うだろう。実在しないものがもつ、在るがままの状態の、言葉による葉脈状の網目、だと《これこそは、フーコーの反実在論の宣言なのであって、例えばエッシャーのあの空間構造を思いうかべてほしい》。

わたしは消去するだろう、この体験をそれが在るがままの姿にとどめておくために(したがって、その体験を虚構として扱うために、というのはそれは実在しないのだからであり、その点は周知である)。すなわち、その体験を安易に弁証法にもとづいて考えるのに使われるようなあらゆる対立矛盾した語を、わたしは消去するだろう。主観的なものと客観的なものとか、内部と外部とか、現実と想像とかのそれぞれの対立や廃止を。こうした混同の語彙のすべての代わりに、距りの語を用いるべきであろうし、しかもその場合に、虚構のものとは、言語に固有な遠ざかりであるということを見てとれるようにすべきであろう《ここでは特に、伝統的な種々の二項対立が消去されていく点に注目しておこう》。

(中略)

言語が事物から距たっているがゆえに虚構があるのではない。そうではなくて、言語はそれら事物の距りであり、それら事物があるところの光であり、しかもそれらの到達不可能性であり、それらの現前だけがそこで与えられる模像なのである(中略)。この距たりの中を進みつつ、この距りを語るあらゆる言語は、虚構の言語なのである。そのとき、この虚構の言語は、あらゆる散文とあらゆる詩を、あらゆる小説とあらゆる省察を、一様に貫流することができる。

長々と引用し、かつ難解な文章だったと思うが、虚構性とは言語のもつ内的な関係だったわけであり、地と図柄が逆転可能な関係であることを傍証として挙げておこう。また、虚構の言語は、詩や小説や散文や論文を通底すると考える立場からは、それらの、やはり伝統的な区分の壁を破

ろうとする結果であり、後でも再論するように、ここにフーコーのすべてのテキストがもつ秘密・謎・迷路を解く一つのヒントがひそんでいるのではないか。なお、この長文の引用は、ソレルスの論、「虚構の論理」（『テル・ケル』誌、15号、1963に所収）と比較して読まれるべきものである。

第三に、言語は思考との関係において把握されている。言語にとって思考とは何か、思考にとって言語とは何か、である。この特徴について考えるために提示した資料、「小説にかんする討論」は司会者のフーコーの導入部の発言である。そこではフーコーは、テル・ケル・グループがブルトンらの *surréalistes* よりもむしろバタイユやブランショと密接な関連をもつことを指摘して、後者の数々のテーマの重要性に言及する。しかも、*surréalistes* の言語観とポンジューバタイユの言語観の相違について、一方の心理重視、他方の思考重視という区分をとおして言及している。この討論記録全体は、60年代フーコーとテル・ケル・グループの親和関係を証明する材料であることも見落さないでいきたい。

さらにまた、討論記録にかんして是非とも言っておきたいのは、先ほどから述べている鏡、ここでは *le double*（写し）のテーマのほかに、《境界》の問題についてである。*penser* と *parler* のあいだの微妙な境界領域の問題が、ソレルスの作品 *Intermédiaire* を暗にほのめかしつつ言及されている。

以上、お話ししてきたように、60年代のフーコーにとって言語の特色は、第一に、*auto-référence* の仕組、入り子型の構造、もしくは合わせ鏡の問題として、第二には、*fiction* の問題として、第三には、思考との関係、さらには境界領域の解明手続として把握されていたと考えられる。この最後の点について、忘れずに補足しておこう。言葉が未知の深淵を測る測深鉛であるとすれば、またフーコー好みのメタフォールを使って言うと空間を駆ける矢であるとすれば、要するに、隠された暗部をさぐる光であるとするならば、フーコーの全生涯は、この言葉の武器を磨きあげ駆使することで、理性と非理性の、生と死の、言葉と物の、犯罪者と非行者の、自己の認識と自己への配慮の、その境界領域の探査の旅であった。

最後に、結びにかえて二つの点を強調しておきたい。

70年代のフーコーは、著作年表から容易に見定められるように、言語の探究から権力の発見へと方向を変えている。なぜ、フーコーは文学と言語の問題から離れるのか。まずは、やはり、68年の五月革命という政治状況がフーコーの立場を左右したと言ふべきであろう。しかも、理論上の問題として、先ほどから述べてきた、*auto-référence* という名の形式探究は、アポリアもしくは袋小路に入らざるをえないからだろうか。ともかくフーコーは、権力問題が言語問題に優先するとの自覚をいだく。後に（1976年6月のインタビューで）「われわれを生み出すと同時にわれわれを規定する歴史は、言語・記号のかたちよりも戦いのかたちをおびる。つまり意味の関係ではな

く権力の関係から成り立つ」(『アルク』誌, 70号, 1977)と言いたとしても、『監獄の誕生』(1975)に明確に認められるように、フーコーの歴史記述は、いわゆる伝統的な権力の歴史ではない、権力の實在論的な歴史記述ではないのである。

そのことに関連するのが、『fictionとしての歴史』という独自の史観である。すでに何度も力説しておいたとおり、フーコーにとって主観的と客観的とか、現実と虚構とかの、単純かつ伝統的な二項対立は有効ではない、妥当ではない。存在するのは言語、そして実践。言語化された現実、言語化される実践しか存在しない。その意味でフーコーは實在論的な歴史記述には疑問をいだきつづけたのだ。「わたしの書いた歴史は fiction かも知れない」と後年(1977年)、逆説を述べさえるのである。それは、Paul Veyne 流に言えば、セザンヌ風の抽象絵画のようなもの。《真実の探究としての fiction》、『fictionとしての歴史』——これこそは、60年代に文学と言語の探究から出発したフーコーの、生涯変わることのない思想戦略だったのではあるまいか。

後記——1990年5月19日に、京大会館で行なった講演の内容に少々補足を加えている。なお、当日はフランス語による若干の資料を配布したが、ここでは割愛した。